

## 今西幸蔵先生との出会いと協働

松宮 慎治

今西幸蔵先生が今年定年を迎えられる。先生は2009年4月に、天理大学から神戸学院大学に赴任された。今西先生とのお付き合いは、私が2012年に有瀬キャンパスの教務センターに異動してからのことである。最初の出会いは、6号館の大教室で開催されていた教職課程の履修ガイダンスであった。教職課程主任のお立場で出席されていた今西先生から、「なぜ、大学院生がここにいるの？」とお声掛けいただいたことを記憶している。当時は20代中盤であったために、外見から大学院生と見間違えられたのだと思う。このエピソード一つとっても、今西先生が学生と接する際の暖かい眼差しが伺える。以来約6年間、事務職員として様々な形でご一緒してきた。本稿では紙幅の制約もあって限られたことしかお伝えできないが、今西先生とご一緒した仕事の一端を、御礼兼ねて3つご紹介したい。

第1に、2013年以来5学部9課程を申請し、そのすべてに成功を収めた教職課程認定申請を挙げる。とりわけ、2014年に現代社会学部、2015年にグローバル・コミュニケーション学部と、立て続けに新学部を設置したことに伴い行った申請は、今西先生のリーダーシップなしに成功しえなかった。新学部を設置するにあたり、教職課程の認定を受けることは本学の経営にとって至上命題であった。しかし同時に、当時の課程認定行政は、ちょうど「厳しくなってきた」と大学関係者に囁かれていた時期にあったため、教職課程認定申請の仕事はどの大学でもきわめてナーバスな環境下にあった。かかる状況にあって、阪神地区の教職課程の研究会<sup>1</sup>への参加を皮切りに、他大学の懇意にされている同じ立場の職員をご紹介いただく等、責任重大、かつ寄る辺ない仕事に戸惑う私を誰よりも助けてくださった。初めて臨んだ2013年度の申請の手続きにおいて、提出前の2度目の事前相談でおおむね問題なさそうだという感触を得たとき、東京メトロに乗る手前で「よう頑張りはった」と肩を叩いて慰労いただいたことを、懐かしく思い出す。

第2に、教職教育サポート室の整備である。本学の教職課程は文部科学省の補助金事業<sup>2</sup>の助成受け、教職を志望する学生を支援する「教職教育サポート室」を整備した。このアイデアは、以前の勤務先である京都学園大学を参考にされた、今西先生によるものである。京都学園大学にお供し、見学させていただいて、一から本学の設備を設計した。数え上げればきりがながい、(1) 指導員（元学校教諭）の常駐 (2) 膨大な図書購入（と貸し出しの仕組み）、(3) 模擬授業教室の整備 (4) 電子ピアノの設置 (5) ポートアイランドキャンパスへの拡大……等々、4年間かけて少しずつ盛り上げてくださった。盛り上げるといえば、場所がややわかりにくいので、教職入門等の講義で学生に「教職教育サポート室を訪問する」という課題を与え、場所を周知されていたことも存じ上げている。自身も何か貢献しなければと思ひ、どうすればこの部屋に学生が自然に滞留するのか、そして互いに学びあい始めるのかを考えた。そのための試みとして、学生が自主的に学びあ

う環境づくりに努めてきた<sup>3</sup>。これらはすべて、今西先生の学生を指導する情熱に押されてのことである。

第3に、学生のための謝罪である。大学で教職課程を担当する教職員ならば、介護等体験や教育実習で時に施設や学校にご迷惑をおかけし、謝罪に伺ったことがあるだろう。ところが、今西先生の場合はスピード感が違っていた。謝罪に伺わなければいけないケースが発生した時点で、躊躇なく行動を起こされていた。2人で電車や車で様々なところにお邪魔したが、ついには夜討ち朝駆けのような形で、急遽関東にまで謝罪に伺ったこともある。このような今西先生のスタイルを模倣し、自身も学生のために謝罪するときは、電話やメールではなく、極力現地に、しかもできるだけ躊躇なく、即時に赴くようにしている。考えてみれば、本学のように1万人規模の大学でありながら、個々の学生に対してここまで熱心なフォローを行う機関は、必ずしも多くないのではないか。規模の大きい大学では、得てして個々の学生の顔が見えにくくなるものであり、それは学生から見た教職員と同様である。しかしながら、本学の教職課程ではそうになっていない。教職員も個々の学生を覚えているし、学生も個々の教職員を覚えている。この前向きな相互関係の一つの象徴が、「何かあれば、すぐに現地に謝罪に伺う」ということであるとすれば、それは今西先生が学生と接するときの、暖かい行動様式から生まれたものであるに違いない。

このように回顧してみると、自らの職業人としての基盤になりつつある教職課程の仕事が、実は今西先生との協働によって生まれたものであることに、改めて気づかされる。さらに言えば、自らの未熟さゆえに、その内実は協働のレベルには到底達しえない、指導-被指導の関係であったように思う。にもかかわらず、先生はあえて私を立ててくださり、陰に陽にご支援を賜ってきたのであるという事実を、今になって実感している。

今西先生は教職課程を離れば、生涯教育や社会教育の研究者でいらっしやう。教育研究により多くの時間を割いていただけるよう尽力してきたつもりではあるが、十分であったかと問われると甚だ心許ない。教職課程に従事いただいたことで、ご自身の研究に時間を割けなかったことも多かったのではないかと、反省しきりである。退職されてからも、先生のことだから、今以上に忙しく過ごされるに違いないが、可能であれば、今後もご指導いただけるとありがたい。そしていずれ、自らを高めていくことで、真の意味での協働を別の形で果たしたいと、手前勝手に考えている。

#### 注

- 1 阪神地区私立大学教職課程研究連絡協議会の2012年度第3回課題研究会であったと記憶している。
- 2 兵庫教育大学を代表校とする大学間連携共同教育推進事業「教員養成高度化システムモデルの構築・発信」である。この事業への参画とそれに伴う補助金獲得自体が、今西先生のご功績の一つである。
- 3 こうした試みは「教職サークル」の設立等、継続した学習グループの構築として結実し、教員採用試験の現役合格者を輩出する等して、一定の成果を挙げている。